
ドラゴンクエスト?～天空の美食屋～

amon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？～天空の美食屋～

【Nコード】

N2620Z

【作者名】

amon

【あらすじ】

現代日本で獣医だった男が、事故で死んでドラクエ5の世界に転生——しかもトリコの外見と能力とほんの少しのチートを持って。果たして、彼はその世界で何を成すのか……。※連載していた他の作品が上手いかないので気分転換に書いたものです。駄文注意、寛容な心で見えて頂けたら幸いです。

プロローグ 『転生！新しい世界へ』

俺の名は、山田恭治。獣医だった。

子供の頃から動物に凄く好かれる体質で、初対面のライオンやトラですらすり寄って来て甘えてくる。俺自身、動物が大好きだったから、彼らを助け触れ合える仕事として獣医になったんだ。

だがある日、馴染みの動物園の往診の帰りに交通事故に遭って死んだ。享年28歳、呆気ない最期だった。

で、気がついた時には巨大な樹の根本にいて、目の前には白い羽の天使がいた。

「ここは世界の源『世界樹』の根本。一生を終えた全ての魂がこの場所に集まり、ここから新たな世界へと旅立つのです」

だそうだ。輪廻転生というものがここで行われるらしい。

で、天使曰く、俺はその転生に際して少し特典があるんだとか。なんでも、それまでの人生の行いによって加減する『徳』というものを使って、幾つかの特典が得られるのだという。ただし、転生する世界とタイミングを選ぶ事はできないらしい。地球にも前世の『徳』で得た特典を行使している者が、多くはないがいると言っていた。

で、俺は獣医として色んな動物達を治療して救った為、かなり『徳』が溜まっているんだそうだ。

更に驚いた事に、俺が転生する世界っていうのが『ドラゴンクエスト

ト5』の世界、しかも、主人公が生まれる3年前に生まれるらしい。小学生の頃にスーパーファミコンでプレイした事は覚えている。PS2や、DSにリメイクされた物が売り出されているのは知ってるが、仕事が忙しくてそっちはやった事がない。

「しかし、よりによってゲームの世界か……」

と、頭を掻きながら言うと、天使は首を横に振った。

「いいえ、違います。無限に存在する多元世界の中に、そういう世界が存在するのです。その世界の物語があなたの世界でゲームとして売り出されたのは、その世界から転生した人間が日本においてその記憶を基にシナリオを書いたに過ぎません」

「へえ、そうなんですか」

意外な所で意外な真相を知った。今更、大した意味があるとは思えないが。

で、早速俺の特典を選ぶ手続きに入る。天使が言うには、俺の累計は分かりやすく数字で表すと129万6844徳——獲徳ランキングとやらの中で、結構上位の成績だそうなの。

それはさておき、俺は最初にこれまでの記憶と人格を全て保持して転生する事を望んだ。

「全ての記憶と人格ですと80万徳、断片的な記憶ですと10万前後となりますが」

「じゃあ、全てで」

これも大して迷わなかった。やはり、俺は俺でありたい。

次に、どの種族に転生するかを選択——人間・魔族・天空人・魔物・動物・植物と色々あったが、これは迷わず人間を選んだ。必要な徳は2000徳。

性別も選べたが、前世と同じ男を選ぶ。女は生理とか何とか肉体的に面倒が多いからな。1500徳。

残りは49万3344徳か……。どうするかな？

「何かしらの物語に登場する存在の能力を得る事も可能ですよ。ただし、同じ種族に分類される存在のものに限られますが」

「同じ種族……つまり、俺の場合は人間に限定されるという事ですね」

「そうなります」

ふむ、だったら何か戦闘能力があった方がいいか。それも、あんまり化け物染みてなくて色々と応用が利く能力……だけど、ドラクエの呪文やら特技はあんまり趣味じゃない。となると……別のところから引っ張ってくる事になるか。

うーん……そうだ！美食屋トリコの能力が良い。

『トリコ』は創作の食材（動物や植物）や、美味しい食材を食べれば食べる程強く進化するグルメ細胞という設定が面白く、また主人公の美食屋トリコの『食べる目的以外では獲物を殺さず、殺した以上

は食べる』という考えに物凄く共感し、結構ハマってた漫画だ。

トリコの戦闘能力は詰まる所、超人的筋力の成せる業。充分化け物染みているかも知れないが、触角人間のサニーや毒人間のココに比べれば、人間という種の基本は守られている様な気がするので、俺的にはOKだ。若干、ゼブラの能力も心惹かれるものがあるが、耳が良過ぎると聞きたくない事も聞こえてしまう弊害があるので、今回はパスする。

という訳で、俺は天使に美食屋トリコの能力が欲しいと告げる。すると、天使は少し難しい顔になった。

「美食屋トリコの能力ですか……。勿論可能ですが、これには膨大なエネルギー消費というリスクが伴いますよ？」

「ああ、確かに……」

トリコが身体を維持する為に1日に必要なエネルギーは、確か数十万から数百万キロカロリー。更に、彼の技『釘パンチ』が1連ごとに3万キロカロリーを消費する。

その燃費の悪さ故に、いつも何かを食べてエネルギーを補充し続けなければならず、僅かな絶食が命に関わる。

「ちなみに、そのリスクを失くす事も出来ませんが……。それには30万徳が必要で、能力を得るのに47万8000徳が必要です。あなたの徳はもう49万とちょっとしか残っていませんので、事実上、リスクを失くすのは不可能になります」

「うーん……。あ、だったら、能力を貰った残りの徳を使って、その

リスクを可能な限り軽減する方向にしたらどうです？」

「軽減、ですか？えーと、ちょっと待ってください」

すると天使はどこからか算盤そろばん（何故に？）を取り出し、パチパチと弾き始めた。

「えー、願いましたは……能力47万8000徳で、残り1万5344徳……1万5344割る30万は……（パチパチパチ）……0.05114666……。そうですね、残りの徳では約5%しか軽減できない計算になります」

「5%か……」

肉体維持に必要な1日分のエネルギーの最大値を300万キロカロリーと仮定すると、マイナス1万5000キロカロリー。『釘パンチ』が1連ごとに3万キロカロリーとして、1連ごとにマイナス1500キロカロリー……雀の涙といったところか。あんまり意味ないな。

「じゃあ軽減は無しで能力をそのままください。あと、外見をトリコに似せるのはどうですか？」

「それなら3000徳で出来ます」

「じゃあ、それをお願いします」

そうなる、あとはどうするか……。

転生先はドラクエ5の世界、しかも俺が生まれるタイミングだと大

魔王ミルドラーズの脅威が迫っている時期だ。生まれる場所にもよるが、完璧に平和に暮らすのはちよつと難しい。いずれ主人公とその妻や子供達が何とかする事になってはいるが……その間には、幾つもの悲劇と試練が待ち受けている。

ドラクエ5を最初にプレイした時、俺は子供ながらに主人公の父パスの死と、母マーサの死が悲しかった。両親を奪われた主人公を、心から哀想だと思った。だから、パスを殺したゲマやマーサを殺したミルドラーズが許せず、倒すチャンスが来た時にレベルをガツツリ上げて徹底的に叩いてやったものだ。

もし、だ……。もし、俺がこの原作知識を持って介入する事で、パスやマーサを死なせずに済むとしたら？ パスとマーサ、主人公とその妻、そして2人の子供達……親子3代仲睦まじくグランバニアに帰還して、最高のハッピーエンドになるんじゃないだろうか。

そうならいい。だが、敵は強大……介入しようとするなら、俺もそのタイミングに間に合う様に強くなければならない。

「あの、俺が強くなるのを……グルメ細胞が進化するのを出来るだけ加速させる、っていうのは出来ますか？」

「そうですね……残り全ての徳を進化・成長加速に注ぎ込んだとすると……」

再び天使が算盤（だから何故っ？）を弾き出す。

「……はい、出ました。通常より3.1倍増しの早さで進化・成長する事になります」

3倍ちよつとか……少し考えてみよう。

転生して俺が物心がついて動けるようになるのを3歳と仮定する。
パパスがゲマの手に掛かるのは主人公が、確か6歳の時……主人公より3年早く生まれるという事だから、その時に俺は9歳……。何処に生まれるにしろラインハットまで行くのにかかる時間を多めに見積もって1年する。これらを考慮して計算すると、修行に使える時間は5年前後……。

ここに進化・成長3倍の効果を計算に入れると、単純計算だが15年分の修行ができる。しかも、俺自身の頑張り次第では30年分にも45年分にも出来る……はずだ！

「OKです。それでお願いします」

「わかりました。では、もう徳が残っていませんので、特典を確認させて頂きます」

ファミレスの注文復唱みたいな感じで、天使は俺が選んだ特典を読み返す。

- ・前世の全記憶・人格の保持
- ・転生後の種族は人間
- ・性別は男
- ・漫画『トリコ』の主人公・美食屋トリコ的能力（戦闘スタイル及びグルメ細胞による超人的身体能力・超嗅覚・超自己治癒力・70種の毒の抗体）
- ・転生後の外見はトリコ似
- ・戦闘能力Ⅱグルメ細胞の進化・成長速度3・1倍

「以上で宜しかったですか？」

「はい、間違いありません。それでお願いします」

「わかりました」

天使がそう言うと、俺の身体が光り出す。どうやら、選んだ特典を反映しているらしい。

「さて、これでいよいよ転生となる訳ですが……、最後に幾つか注意点をお伝えします。これから転生する世界は、決して『ゲームの世界』ではありません。あなたにとっての現実世界です。死ねばそこまで、死者を蘇らせる呪文やアイテムなどという都合の良いものは存在しません。あれは人間の願望から作られた、ゲーム上だけのフィクションですから。未練を残して地上に留まりでもない限り、死ねば再びこの世界樹の下へ魂が帰還し、新たな世界に旅立つ事になります。宜しいですか？」

「分かりました。肝に銘じておきます」

「結構です。では、行ってらっしゃいませ。あなたの新たな人生に、幸多からん事を」

天使のその言葉を聞いた瞬間、俺の意識はプツリと途切れた――。

第1話 『新しい家族！ホワイトパンサー、その名はスノウ！』

「9998……！9999……！10000……ぷはぁッ！」

腕立て伏せを終えて、地面に寝転がる。

あの世界樹でのやり取りの後、俺は無事この世界——ドラクエ5の世界に転生し、5歳になった……。

生まれたのは、ルラフェンにほど近い山奥でひっそりと暮らす木こりの家だった。だが、母は俺が物心つく前に病気で亡くなったそう。そう教えてくれた父も、去年の暑い夏に過労と熱中症で倒れ、俺も看病したが結局そのまま亡くなった。

「すまないな……小さなお前を、たった1人……残して、逝ってしまう、わしを、どうか……許して……おく、れ……」

これが、父の最期の言葉だった。

そんな父には非常に申し訳なく思うが、前世の人格そのままに転生した俺は、父に対して肉親という感情が薄かった。仮にも父親の死を他人の死と受け取ってしまった時には、軽く自己嫌悪に陥った……。

不幸中の幸い……と言っているのか微妙だが、精神だけは28歳だったおかげで何とか割り切り、両親から貰った名前も捨て、俺は今、前世と同じ『キョウジ』と名乗って1人で暮らしている。

残された家には釜戸に井戸、薪で沸かす風呂、畑に卵を取る為の鶏

も飼われており、生きていくには十分な環境だった。だから俺は、転生する際に決めた当初の目的――主人公やパパスの助けになる為に、修行に専念してきた。

完全に人格が覚醒したのは3歳からだだったが、父の目を盗んでしか修行が出来なかった。なので、1人になってからは1日中野山を駆け回り、畑を耕し、近くの川で泳ぎ、とにかく身体を徹底的に鍛え込んだ。

目標があると人間は努力が出来るものらしく、過酷な修行も自分の決めた目標の為だと思いと、まるで苦に思わなかった。

その修行の甲斐あって、この1年で俺の力……グルメ細胞はどんどん活性化し、進化した。魔物と戦い、捕獲して、食べる事で。

俺も最初は驚いたんだが、この世界では魔物は野生動物の一種として認識されており、食材や薬や道具の原料として市場で取引され、広く一般に流通している。魔物の剥製や毛皮の敷物なんかも作られ、高値で売りさばかれていると、ルラフェンの町とかに行った時に聞いた。

ゲームでは、町に商店は武器屋・防具屋・道具屋の3つしか存在しない事になっていたが、実際は違う。肉屋も魚屋も八百屋も花屋もあるし、酒場以外にも飲食店が数件営業している。外から来た行商人が露店を出している事もあれば、規模は小さいが市が立つ日だった。

また、ゴールドに関してもゲームとは全然違う。モンスターを倒せばその場でポンとゴールドが手に入るのではなく、倒したモンスターを目的に応じた店に卸して換金する事でゴールドを得る経済シス

テムになっている。

だから俺も、生きる為と修行の為に魔物を捕獲しては、食材として自分で食べたり町に売りに行ったりしているんだ。特典として美食屋トリコに似るようになってもらったのと、色々好き嫌いなくモリモリ食べているおかげか、今の俺の体格はかなりガッシリしているし、身長も133センチ——前世で日本における5歳児男子の平均身長は、確か110センチぐらい？だったから、それに比べりゃ大分デカイ。おかげで誰も俺を5歳だと思っていない……。

ルラフェンの周辺だと美味しい魔物……っていうか食べられる魔物があんまりいないから、2〜3日かけて港町ポートセルミの辺りやカボチ村まで出向いて捕獲する。その範囲内で食べられる魔物は、ドラゴンキッズ・ビックアイ・エビルプラント・おばけきのこ・メタルスライム・モーザ・デスパロット・へびこうもり……と、こんなところだ。どれも結構美味かった。

中でもメタルスライムを初めて食べた時は驚いた。っていうか、そもそも食べられた事にかなり驚いた。

カボチ村の西にある洞窟を探索した時、運良く遭遇したのを何とか1匹だけ仕留めた事があった。その時に興味本位で齧ってみたら、美味いとまでは言えないものの食べる事はできた。具体的に言うと、プルプル食感の金属といった感じの味だった。

ただ、どうやらメタルスライムの身はある一定以上の衝撃を与えるると反射的に硬化するらしく、最初から硬いものだと思って力を入れて刃物で勢い良く切ろうとすると固まって刃が立たない。だが、ゆっくり優しく切ると、プリンの様にフルツと切れる。

恐らくそうした性質から、敵を見たら素早く逃げる習性を持ったんだろう。食べる際も、ゆっくりゆっくり噛まないと、同じく固まって歯が立たなくなる。さしずめメタルスライムは『特殊調理食材』及び『特殊賞味食材』といったところだ。

その上、メタルスライムを咀嚼し飲み込んだ瞬間、俺のグルメ細胞が急激に進化した。多分、ゲームでメタルスライム系の魔物を倒すと、大量の経験値が手に入ると同じようなものだったんだろう。

だが、それ以降メタルスライムを仕留める事は出来ていない。遭遇しても、すぐに逃げられてしまう。命の気配を消し、相手の認識を晦ませる技術『消命』が上手く出来れば何とかなりそうなんだが……まだまだ修行が足りない。

という訳で……

「さて……そろそろ、朝メシの調達に行くとするか」

色んな意味でパワーを付ける為、俺は早朝の筋トレの汗を拭い、朝食の食材の捕獲に向かった。

「さうて、いるかなあ？」

やってきたのは少し前から目を付けていた岩山の洞穴……並の人間にはとても辿り着けない、大型の魔物の住処と睨んだ場所だ。前に来た時、岩肌に染み着くように爬虫類の生臭さに似た臭いがあった。この辺りの魔物の生息状況から推測するに……恐らく、成長したド

ラゴンキッズが住んでいるはず……。

「グルルルル……ッ！」

「っ！いたぁーッッ！！」

ガッ！バキッ！

「グワァーッ！！」

「うおっ！？このッ！」

ドガッ！ベキッ！！

「喰らえッ！『2連釘パンチ』！！」

ズドッ！ドッ！ドンッ！！！！

「よしっ！捕れた捕れたっ♪」

殴り倒した体長約3メートル、体重250キロはありそうな良形ドラゴンキッズを背中に担いで、穴から出る。ドラゴンキッズは、名前の通りドラゴンの子供——周囲の魔物の実力が低い場所で成長し、ある程度成長すると飛んで別の土地に去っていく習性があるんだと、その道の専門家から聞いた。

仕留めたコイツは、飛び立ち間近の固体だったようだ。このサイズは脂と肉、そして歯応えと柔らかさのバランスが良くて絶品だ。店に卸せば、キロ800〜900ゴールドになる。貨幣価値は1ゴールド＝10円と考えれば妥当だろう。

だが、今回の目的はゴールドではなく俺の朝食——よってこのまま家に持ち帰り、調理して美味しく頂く♪

え？重くないのかって？何の為に必死こいて修行してグルメ細胞を活性化させてきたと？

という訳で、良形ドラゴンキッズをロープで身体に括りつけて背負い、岩山を降りて自宅への帰路につく——。

「ん……？」

途中の森の中を歩いていた時、俺の超嗅覚が漂う特徴的な獣臭——キラパンサーの臭いを捉えた。それだけじゃない……、獣臭に微かに紛れるこの独特の生臭さ……これは、羊水の臭いだ。

どうやらキラパンサーの雌が近くで出産しようとしている様だ。

「……ちよつと見たいなあ」

動物好きで元獣医の血が騒ぐ。野生動物の出産なんて、滅多にお目にかかれるもんじゃない。

俺は背中のドラゴンキッズをその場に下ろし、『消命』で気配を消して臭いを追った。

「ハッ！ハッ！ハッ……！！グウッ！？」

(っ！あれは……！)

臭いを追って数メートル進んだ先で、俺は1頭の産気づいているキラパンサーを見つけた。しかも、ただのキラパンサーじゃない……本来濃い黄色であるはずの毛色が白く、赤いはずの鬣は金色をしている。どうやら、ライオンやトラに稀に起きる白化が起きた個体らしい。『ホワイトパンサー』とでも名付けようか。

俺は感動と興奮を抑え、何とか『消命』を保ちながら茂みの中に身を隠し、ホワイトパンサーを見守る。

「グ、グウ……ウウツ！」

力んで苦しそうな唸り声をあげるホワイトパンサー。尻の方を見ると、既に破水したらしく地面が湿っている。

「グウ、ウウ……ガウウツ！！」

(っッ！！産まれたぁーッ！！！)

ホワイトパンサーがひと際大きく絞り出す様な鳴き声を上げた時、パンサーの赤ん坊――ベビーパンサーが産まれた。

「ミュウ……！ミヤウ……！」

「グルウ……ペろ、ペろ」

産声を上げたベビーパンサーに、母パンサーは優しく粘膜を舌で舐めとり、羊水で濡れた毛皮を乾かす様に舐め続ける。

我が子に愛情を注ぐ母親の姿……、美^{つく}し過ぎる……ッ!! 野生の、
しかも白化したホワイトパンサーを見られただけでも感動なのに、
その出産シーンまで拝めるなんて……感動MAXだ! テンションペ
タペタだ!!

思わず涙が零れる……、鼻の奥がツンと痛くなる……! 動物園で何
度かライオンの出産に立ち会った事はあるが、やはり野生の動物の
姿は、感動も……

ヒュンッ! ドシュッ!

「ガギヤアアアアアアッッ!!!!????」

「……………あ?」

……何が起きた……?

ホワイトパンサーは、産まれたばかりの子供に グルーミングを施
していたはずだ……。

それが、いきなり、どこからか何かが飛んで来て……母パンサーの
頭に刺さった……?

何だ、あれは……?

……あれは、矢だ……。冒険者やハンターが、魔物を倒す時に使う
……ボウガンの矢だ……!

ガサッ……

一瞬、だった……。あの下衆野郎の言葉が耳に入った瞬間……。目の前が真っ赤に染まって、自分を抑えられなかった……。

怒りでグルメ細胞が活性化し、パワーアップしたのか……。まだ出来なかったはずの5連釘パンチが出来た……。でも、欠片も嬉しくない……。

あんな下衆野郎をぶっ飛ばして……。いや、あれは多分死んだだろう。だが、あんな下衆が死のうが生きようがどうでもいい。どっちにしたらって、死んだ母パンサーは生き返らない。虚しいだけだ……。

「ミユウ……キュフ、キュフ」

振り返って見れば、子パンサーは生き絶えた母親にすり寄って鳴いている。

まだ産まれて1時間も経ってない。目も開いてないし、鼻も利かないんだろう……。母親が死んだ事が分からないんだ。

「……キュフ、キュフ」

このまま放って置けば、この子パンサーはいずれ死ぬ事になる。

他の魔物に襲われるか、母乳から免疫を受けられず病気になるか……。いくらキラパンサーが『地獄の殺し屋』と異名を取る獰猛な魔物でも、産まれたての赤ん坊は無力だ。

ある程度成長するまで、誰かが守ってやらなければ生きてはいけない……。本来なら母親が守ってくれたはずなのに、あの下衆野郎の所為で生と死の境界線に立たされている。野生における自然の生命

のせめぎ合いなら仕方がない……だが、これは人間の所為だ。人間の醜い欲望の所為だ。

そう思うと、もう見捨てられなかった。俺はそっと、優しく子パンサーを抱き上げる。

「キュフ……」

チュプ、チュプ……

母親の乳と勘違いしたのか、ベビーパンサーは俺の指を吸う。

「乳が欲しいのか……っ、そうだ！まだ初乳が出るかも！」

母パンサーはまだ死んで間もない。吸わせれば、まだ初乳が出るかも知れない！

俺は急いで、横たわる母パンサーの乳房を探し、軽く乳首を摘んしてみた。すると、薄黄色っぽい乳が滲み出てきた。

「やっぱりまだ出る！」

すかさず子パンサーにその乳首を含ませる。

「キュフ、チュパ、チュパ……」

子パンサーが乳を吸い始めた。口元に、母乳が滲んでいる。よし、これで母親から免疫を受け取る事が出来る。今後の生存率がグンと上がるはずだ。

満腹した子パンサーが乳首から口を離してから、俺は近くに穴を掘り、母パンサーを埋葬した。

（……世界樹の下に行き、新しい命に生まれ変わってくれ……今度こそ、その生涯を全うできるように……）

母パンサーの冥福を祈り、俺は子パンサーを抱きかかえ、さつき置き去りにしたドラゴンキッズを回収して家へ戻った。

「何か、お前に名前をつけてやろうか」

「キュフ、キュフ」

俺の腕の中で安心していいのか、モゾモゾと頭を擦りつけてくる子パンサー。可愛いなあ……なんて名前が良いか。

「うーん……白いホワイトパンサーだからなあ……」

白い……白……白いシート……白い雲……白い雪………雪？

「そうだ……！決まったぞ！お前の名前は、『スノウ』だ！」

「キュフー！」

分かっているのか、いないのか。高く持ち上げた子パンサー——スノウはまだ小さい前脚を動かし、喜んでいる様に聞こえる鳴き声を上げる。

「今日からお前は、俺の相棒で家族だ！よろしくな、スノウ！」

「キュフ、キュフ〜！」

こうして、俺にスノウという新しい家族が出来た。キラーパンサーの子供を育てるなんて、当然初めての事だが、俺はスノウを見捨てないと決めた。

だから責任を持って、健康に逞しく育ててみせる。こいつは、俺の家族なんだから――。

第2話 『旅立ちの時! いざ、ラインハットへ!』

ガサガサ……

「……おっ、モーザだ。よし、スノウ。今日はいつを1人で仕留めてみる」

「ミガ!」

スノウは、茂みの中から飛び出し、モーザに襲いかかった。

ホワイトパンサーの子、スノウを家族に迎えてから早いもので3年が経とうとしていた――。

俺は8歳、スノウは3歳になり、2人で元気に暮らしている。

最初の内、スノウをどう育てたものかと頭を悩ませたが、ポートセルミで暮らす第一線を引退した魔物使いのカロン爺さん――通称『モンスターじいさん』に相談して、どうにか健康に育てる事が出来た。魔物の生態についても色々教えてもらったし、何度かスノウが体調を崩した時も、カロン爺さんには大変世話になった。

ちなみに、カロン爺さんには兄さんと弟さんが1人ずついて、現役時代は『魔物使い3兄弟』と異名を取るほどバリバリ活躍していたとか、いなかったとか……。で、兄さんはオラクルベリーで暮らしていて、弟さんはまだ世界中をあちこち旅しているんだと。

それはそれとして――俺達の事。

スノウは3歳の現在、柴犬より一回りデカいぐらいの大きさに成長した。ちなみにメスだ。ずっと俺と一緒に暮らし、モリモリ食べ、ある程度大きくなってからは一緒に魔物と戦っている。今では名実ともに、立派な俺の相棒だ。

ちょっと、甘えん坊だけだな。

「ミガウー！」

そうこうしている間に、スノウがモーザを仕留めて戻ってきた。

「ミガ！ミガウ！」

足を咥えて引き摺ってきたモーザを俺の前に置くと、俺を見上げて「褒めて褒めて！」と目でキラキラ訴えてきた。

「よし、良くやったスノウ！偉いぞっ！」

なで、なで

「ミガ〜♪」

頭を撫でてやると、スノウは目を細めて満足げに鳴き、俺の手にグイグイ頭をすり付けてくる。な？甘えん坊だろ？

スノウが初めて自分で魔物を仕留めた時に、その成長が嬉しくて、つい褒め過ぎて撫で過ぎた所為かも知れないな。

ついでに言うておくと、俺もこの3年で成長した。トリコと同じグ

ルメ細胞の影響か、身長は160センチまで伸び、筋肉も結構ついてきて、到底8歳の子供には見えない身体付きになっている。益々、トリコにそっくりになってきた。

修行もずっと欠かさなかったおかげで、今では『釘パンチ』も7連まで打てる様になった。『威嚇』すればこの近辺の魔物は脱兎の如く逃げ出すし、『ナイフ』の切れ味も鋭くなり、『フォーク』の貫通力も上がった。ただし、飛ばして攻撃する『フライングナイフ』『フライングフォーク』や、脚で使う『レッグナイフ』『レッグフォーク』は実戦で使えるレベルには至らず……、まだまだ修行が足りないようだ。

だが、足りないからと言ってこれ以上、悠長にはしてられない。そろそろ、旅立たなければならぬ。

運命の日……パパスがゲマの手にかかり、命を落とす予定の日が1年後に迫ってきている。だが、正確にいつ事件が起きるのが分からない。だから、それを阻止しようとするなら、早い内にラインハットに入り、注意深くその日を待って動くしか方法がない。

それに近頃、ルラフェンやポートセルミで耳にする噂も気になる……。

俺は見た事がないが、『光の教団』の教徒を名乗る奴が頻繁に町に現れ、奇跡とやらを起こし「信じれば救われる」みたいな事を言っていて信者を募っているとか……。そんな胡散臭く、得体の知れない連中を信じてホイホイついに行ってしまう人間も少なくないらしい。

奴隷にされて、神でなく大魔王を祭る神殿の建設をさせられるとも知らずに……。

いよいよ、俺も物語に身を投じる時期が近付いてきていた――。

「……よし、荷物はこんなもんか」

スノウがモーザを仕留めた後、俺もビックアイを仕留め、それぞれ自分で仕留めた魔物で朝食を済ませ……俺は旅支度を整えた。転生から8年を過ごした家とも、しばらくお別れだ。

「……お世話になりました」

家と、亡くなった父と母に別れを告げ、俺は外に出る。そこで待っていたのは、俺の相棒スノウ。

「行くぞ、スノウ！」

「ミガウツ！」

スノウを引き連れ、俺は家を後にした……。

山を降りて平地を東に向かうこと3日……俺達はポートセルミに着――この港から出るラインハット地方行きの船に乗る。

船着場のチケット売り場で2等船室のチケットを買い、船に乗り込んだ。2等でしかも個室でもないのに、俺とスノウの2人分で50

00ゴールドもした……。

そして、その日の正午——船はラインハット地方、ビスタの港へ向けて出港した。

「はぁ、良い風だな。なあ、スノウ」

「ミガ〜♪」

俺の隣で、海風に金色の鬘を揺らし気持ち良さそうに目を細めるスノウ。良い船旅になりそう……

「ま、魔物だぁッ！魔物が襲ってきたぞおーッ！！」

……だと思ったが、優雅な船旅を満喫していたのも束の間——水夫の叫び声で、船の上が俄かに騒がしくなる。

行ってみると、船の上に乗り込んできたのはデカイ二枚貝の魔物『たまたが』が3匹と、白く半透明な頭のホイミスライム似の『しびれくらげ』4匹だった。

「く、くそっ！船から出て行きやがれってんだ！このッ！」

水夫が鉈を手に、魔物の群れに立ち向かっている。ちょっとへっぴり腰だが……。

「ピキィ！」

ニユルッ、ビシッ！

「うわぁ!？」

しびれくらげの触手攻撃で、水夫が持っていた鉈を落とし、尻もちをついた。こりゃ、加勢した方が良さそうだな……。

俺は戦闘の現場に近寄り、『威嚇』を放ちながら魔物達に叫ぶ。

「『海に帰れッ!』」

「「「「……ッ!？」」「」」」

俺の『威嚇』に、魔物達がビクッと動きを止める。ついでに、戦っていた水夫達も動きを止めた。さて……トドメのもう一声といこうか。

「『海に……帰れえッ!!!』」

『威嚇』を強めて怒鳴る。すると――

「「「「ピヒィィィッ!!!?？」」「」」」

魔物達は一斉に海に飛び込み、逃げていった。

「ふう……」

息を吐いて気持ちを落ち着け、『威嚇』を解除する。とりあえず、あの程度の海の魔物なら『威嚇』だけで追い払える事が分かった。

「「「うおお〜っ!!」「」」」

「ん？」

歓声に振り返ると、さっきまで固まっていた水夫達がいつの間にか俺を取り囲んでいた。

「凄いぞ、兄ちゃん！」

「一声で魔物どもを追い払っちゃったっ！」

「凄い迫力だったなあ！？思わずこっちまでブルっちまったよ！」

口々にそう言い、俺は水夫達に肩や背中をバシバシ叩かれた……。痛くはないが、加減してほしい。

その夜、俺はスノウと一緒に水夫達に酒盛りに誘われ、たらふく料理をご馳走になったが、同じぐらいグイグイ酒を飲まされた。俺は精神こそ三十路を越え、身体もそこそこデカくマツチョだが……。実年齢はあくまで8歳、未成年も未成年だ。いくら言っても信じてもらえなかったが……。

それから俺は船の船長に、「ビスタの港に着くまでの間だけで良いから、船の護衛を務めて貰えないだろうか？」と頼まれた。報酬として、最初に払った船賃5000ゴールドを返金し、更に1等貴賓室とまではいかないが特別に個室を用意してくれるという。

報酬も悪くないし、1ヶ月程度という短い時間とはいえ魔物を相手にしていれば腕も鈍らずに済む。そう考えた俺は、船の護衛を引き受けた。

何度か襲撃してきた魔物達を、ある時は食材として捕獲し、ある時は『威嚇』で追い払い……そうして海に行くこと1ヶ月ちよい、船はラインハット地方ビスタの港に到着した――。

「じゃあ、船長。それに、皆も元気で」

「ああ、キョウジも元気でな」

ビスタの港で、俺は世話になった船長や水夫の皆に別れを告げる。

「別れがたいなあ……」

「キョウジ、お前いつそのこと、このままこの船の船員になっちゃまえよ」

「そうだそうだ！それがいいぜ！」

結構仲良くなり、皆、別れを惜しんでくれた。とはいえ、俺にも旅の目的がある。

「残念だけど、俺にもやる事があるんで」

「そうか……それじゃあ、仕方ないな。元気でな、キョウジ！」

「ありがとう、船長！」

俺はスノウと共に、ビスタの港に降りた。水夫達が積荷の積み下ろしをしている脇を抜けて、港の中ほどに入る。

そこで、港の管理人と思しきオッサンが船の様子を眺めているのを見つけた。

「すみません、この港の管理人の方ですか？」

「ああ、そうだが……何か用かね？」

「いえ、用ってほどの事じゃないんですけど……パパスって人の事、何か知りませんか？」

「ん？パパスって、サンタローズのパパスさんの事かい？」

「ええと……はい、多分」

ある程度、曖昧に聞いておくと怪しまれるからな。

「それなら良く知っているよ。去年、ここから船に乗って旅に出て行ったからね。まだ小さな息子さん連れて……確か、リュカ君って言ったかな？今頃、どこにいるのやら……」

オッサンは懐かしむように空を見上げる。

しかし、パパスが旅に出たのが去年とは結構最近の事だな。それに、主人公の名前はリュカって言うのか……ゲームでは俺は自分の名前にしていたから、ちょっと面白いな。

「それで、パパスさんに何か用なのかい？」

「あ、いえ、そういう訳じゃないんです。ただ、そういう名前のメチャクチャ強い戦士がこの地方にいるって、ちょっと小耳に挟んだもんで……」

「ああ、なるほど！パパスさんも結構有名な人なんだな〜！」

オッサンは納得したように頷く。どうやら、パパスを知る人の彼への信頼度はかなり高い様だ。

やっぱり死なせるのは惜しいし、その方が世の中の為にも良さそうだ……。ゲマ、何が何でも倒してやる……！

という訳で、先を急がなければならない。ビスタの港を出た俺は、サンタローズへは寄らず、真っ直ぐラインハットに向かう事にした。

大凡その時期しか分からない以上、先回りして待ち構えるしかない。先にラインハットに入り、ヘンリー誘拐の事件が起きるまで待つ。それまでは状況に変化が生じる様な行動は避けなければ……。想定しない事態、それも状況を悪化させる様な事態が発生したら、元も子もない。

とにかく、急がなければ……。ここからラインハットまでは……。多分、どんなに遠くても1週間もあれば辿り着けるだろう。

さて、出発するか――。

「よし、行くぞスノウ。目指すはラインハットだ！」

「ミガ！」

俺とスノウは平野を歩き、ラインハットを目指した。港から先ず北へ向かい、サンタローズの村が見えた所で東へ……。途中、何度か魔物が襲ってきたが、この地方の魔物は弱く、ルラフェン周辺で修業した俺とスノウの敵じゃなかった。

ただ、食べられる魔物が多い点はこっちの方が優れているな。デカイ芋虫みたいなグリーンワームだって、キモい見た目を我慢すれば美味かったぐらいだ。食べられるかどうかは、カロン爺さんから貰った『魔物図鑑（直筆）』で調べた。

そうして歩くこと1日半……。俺達は大きな川に行き当たり、そこにあったラインハットが管理する地下道に辿り着いた。

だが……

「ダメだダメだ！ここを通す訳にはいかん！」

「何ですか！？」

通して貰おうと関所に入ってみれば、いきなり兵士に通せんぼされた。

「お前みたいな小僧が、たった1人で旅だと？しかも、お前が連れているのは色こそ白いがベビーパンサー、『地獄の殺し屋』キラー

パンサーの子供じゃないか。怪し過ぎるわ!」

「何ですかそれッ!? スノウは俺の相棒で、ちゃんと黙てあります! 見た目で決め付けないで下さい!」

「ミガガ、ミガウ! カルルル……ッ!」

「ええい! 黙れ黙れ! 国王陛下の命により、今は警戒が強化されているのだ! 怪しい者は関を通してはならぬとな!」

なんて兵士だ……俺を勝手に怪しい奴と決め付けるわ、融通は利かないわ……そりゃ白いベビーパンサーを連れた見た目12、3歳（実際は8歳）の子供なんて、怪しく見えるかも知れないが……。

「さあ! 話は終わりだ! とっとと立ち去れ! それとも……捕まって尋問でもされたいか!？」

「わ、分かりました! 帰りますよっ! スノウ、行くぞ」

「ミガウ……」

スノウは相当不服なようで、ふくれっ面で悔しそうに鳴いた。俺もあの兵士の態度はムカつくが、ここで騒ぎを起こす訳にもいかない。そっとスノウの頭を撫でて宥める。

「ほら、機嫌直せ。行くぞ」

「……ミガ」

渋々って感じだが、とりあえず納得したようだ。スノウを連れて、

俺は関所から出た。

「こうなったら仕方ない……泳ぐか」

関所が通れないとなれば、目の前の川を泳いで渡るしかラインハットに行く方法はないんだから、仕方がない。

俺は関所から川沿いに南下し、関所が見えない場所までやってきた。

「さてと……」

服を脱ぎ、トランクス一丁になってから荷物の中からロープを引っ張り出し、自分の胴に服を含めた荷物を括りつける。

「これでよし。スノウ、ちゃんと俺について来るんだぞ？」

「ミガガ！」

スノウは良い返事を返してくる。ルラフェン近くの家にいた頃、俺と一緒に湖や川、海で泳いで魚や海の魔物を捕獲していたから、俺もスノウも泳ぎはバッチリだ。この川ぐらいなら、何とか泳ぎ切れるだろう。

「よし、行くぞ！」

「ミガッ！」

俺とスノウは、勢い良く川に飛び込んだ――。

「ゼエ、ゼエ……け、結構しんどかったな……。大丈夫か？ スノウ」

「ギュフウ、ギュフウ……ミ、ミガ……」

川を泳ぎ切った時、俺とスノウは疲労困憊状態だった……。

予想以上に川の流れが早く、俺達は大分下流に流された。おかげで泳ぐ距離も延び、かなり体力を^{エネルギー}消耗してしまった……。息が整って、冷えた身体が温まったら、何か食べてエネルギーを補充しないと……。

その後、焚き火で濡れた服や荷物、それに身体を乾かした俺達は、近くの魔物を捕獲してエネルギーを補充——腹を満たし、再びラインハットを目指した。

ラインハット城と城下町に辿り着いたのは、その翌日の昼前の事だった……。

第3話 『時来たる！倒せ、邪悪なゲマ！』

俺とスノウがラインハットに辿り着いてから、10ヶ月——つまり、ルラフェン近くの山奥から旅立ってから1年が経とうとしていた……。

俺達はラインハット近くの、常人には到底近付けない岩山の中腹に、『ナイフ』と『フォーク』で岩を真四角に切り出して部屋を造り、そこを仮住まいとして暮らしていた。

食糧はスノウと一緒にそこらの魔物を捕獲して賄ったり、町のレストランで食べたり——町に行く時、スノウは留守番だ。お土産を買って帰っている。生活に必要な日用雑貨なんかも、そういう時に買う。その為のゴールドは、捕獲した魔物を町の店に卸して得た。

傍から見たら半野人のような生活も、生来アウトドア好きな俺には快適だった。

だが……いくら生活が快適でも、毎日毎日、来る日も来る日も、朝起きて山からラインハットの城下町に降り、目立たない様に城の様子を窺い、町の人々の噂話を盗み聞きし続ける日々は正直苦痛だった……。

聞こえてくる噂も特に面白いものではなく、多少興味を引いたのはラインハット王家に関する噂ぐらいのもの——前王妃の息子であるヘンリーは悪戯好きの困り者だとか……、現王妃は自分の息子であるデールばかりを可愛がっているとか……、ヘンリーとデールのどちらが次の王になるのかとか……、あとは『光の教団』の噂とか……。

こんなもの、滞在1週間で聞き飽きた……。しかも、城下町には娯楽施設の類はなく、あっても酒場が大小合わせて4件あるだけ……言っちゃ悪いが、つまらない国だ。時々、無性にオラクルベリーのカジノに行きたくなったが、一々川を泳いで渡らなければならぬ上に今のオラクルベリーは特に何もない平凡な町だと、カロン爺さんが言っていた。どうやら、オラクルベリーにカジノが出来るのはこれから10年の間の事らしい。残念……。

あまりに退屈なので、半年ぐらい前にパパスやリユカがゲマと遭遇する予定の東の遺跡にも、下調べとして行ってみた。

ラインハットを囲む山並みを越え、西から北へ回って東へ行った所に遺跡はあった。

慎重に中の様子を窺い、内部の構造を調べた。内部は広い空間を通路が階段などで立体的に交差するという迷路のような構造だったが、俺は身体能力を生かして下の通路に飛び降りたり、上の通路によじ登ったりと迷路における反則行為を平然とやったおかげで、全然問題なかった。

途中で人の気配を感じた部屋があり、『消命』で気配を消して様子を伺ったら、それはもう人相の悪い男が3人たむろしていた。あれが恐らく、これからヘンリーを誘拐する人攫い共なんだろう。出来ればあの場で叩きのめしてしまいたが、迂闊にそんな事をしたらヘンリー誘拐事件が起きなくなり、この先の展開が変わって対処出来なくなる恐れがあったので出来なかった……。

それに奴らの話を盗み聞いた限り、その時はまだこの国で人を攫ってはいないらしかった。国の警備が思いの外厳しくて、仕事がいとこぼしていた。俺も関所で追いつ返されたし……ラインハット国

王はもしかしたら、『光の教団』の噂を知っていて、その為に警備態勢を強化しているのかも知れない……。

一応その後も洞窟の奥へ進んでみたが、水路の奥に空の牢屋があるぐらいで特に変わった所も無く、その時は何もせずに洞窟を後にした。

で、現在に戻ってくる訳だが……今日も今日とて、城の様子を窺っている。

「あむ、モグモグモグ……はあ」

城の城門が見える位置にある、オープンテラスのレストランで、注文した料理をつまみながら溜め息を吐く。

ほぼ毎日こうして城門を見張り続けて、もう1年が経つというのに……一体、いつになったらパパスとリュカはやって来るんだ？ っていうか、ホントに来るのか？

今日までに町のレストランの料理もことごとく制覇しちゃったし……こうしているのも、いい加減飽きたなあ……。

「あ……あ？」

再び料理を口に入れようとした時、気になる人影が目についた。

古ぼけた簡素な鎧に皮の腰巻き、背中に使い込まれた剣を背負う、黒ヒゲを生やしたガタイの良い黒髪のオッサン……。

紫色のターバンに紫色のボロマントの少年……。

少年について歩く、スノウより一回り小さい普通の色のベビーパンサー……。

（キターーーーーッッッ！！！！）

間違いない！パパスとリュカと……ベビーパンサー！待ちに待った日が来たッ！！

ということは……ヘンリー誘拐も今日って事だな！よしっ！今の内に、東の遺跡へ先回りだ！

「ガツガツガツ！モグモグ！ゴクリッ！ご馳走様でした！すいませーん！お勘定お願いしまーす！」

「はーい！」

俺は素早く料理の残りを平らげ、勘定を済ませてレストランから飛び出した。

城下町を出て、岩山の洞穴に駆け込む――。

「スノウ！すぐに出掛けるぞ！ついて来い！」

「ミガ！」

留守番させていたスノウを連れて、また飛び出す。俺とスノウの脚

なら、走れば半日もあれば余裕で遺跡に着ける。だが、急がなければ――！

俺とスノウは、念のためラインハット城の南から回り込むルートで東の遺跡へ向かった。例によって、途中魔物が何度か襲ってきたが、一々戦っていられないので強めの『威嚇』で追い払った。

そして、その日の夕方――俺達は東の遺跡に到着した。

「ハア、ハア……やっと着いた。スノウ、大丈夫か……？」

「ギユウ、フウ……ミ、ミガ……！」

大丈夫らしい、スノウも随分逞しくなった。

さて、それはともかく……一先ずは遺跡の入口が見渡せる所で、様子を窺うか……。ここまで来て、人攫いがヘンリーを連れて来なかったり、パパスが来なかったりしたら、先回りした俺は間抜け過ぎる。

が、その心配は杞憂に終わった――俺とスノウに遅れる事、数時間後……馬に乗った人攫いの男2人が、縄で縛り上げられ猿轡まで噛ませられた緑色の髪の少年を抱えて戻ってきた。見える限り、服装も貴族っぽいし、あれがヘンリー王子に間違いないだろう。

近くの岩の陰に身を潜め『消命』で気配を消し、奴らの会話を盗み聞く。

「へへへ、首尾よくいったなあ！」

「ああ！これで後は、あの連中が引き取りに来るまで、奥の牢屋にぶち込んでおけばいい。軽い仕事だったなあ！」

あの連中……ゲマの事か？ 人間でありながら、あんな邪悪な魔族とゴールドで取引するとは……とんでもない下衆野郎どもだ。

「王子様を連中に渡しや金が入る！その後で、あの悪くい太后様にヘンリー王子は始末したと報告すりゃあ、またたんまり金が入る！しばらくは遊んで暮らせるぜ！」

「ギャハハハッ！全く、笑いが止まらねえ！さっさと中に入って、前金で買った酒で早速祝杯というぜ！」

下品でお下劣な声で馬鹿笑いしながら、近くの木に馬を繋ぎ、人攫い共は中に入って行った……。

（……事のついでだ……二度と人攫いなんか出来ないよう、ボッコボコにしてやる……！）

気を抜くと殺気が漏れて『消命』が解けてしまいそうになるのを必死に抑え、中に入って行く下衆共を見送る。

それからしばらく、その場で待機していると……1時間も経たない内にパパスが走ってやって来た。

「ハア！ハア！ハア……馬の蹄の跡を追ってここまで来たのだ！間違いない、この遺跡の中にヘンリー王子が……！一刻も早く、救い

ださねば!!」

パパスは素早く息を整え中に突入して行った。

まさか……あの人、ラインハットからずっと走って来たのか?という事は、あの人の脚は馬並に速いって事で、スタミナも馬並って事に……。今の俺が言えた義理じゃないが、どんな身体してるんだよ……。

ともあれ、パパスが来たのなら、もうしばらく遅れてリュカとベビーパンサーも来るだろう。

俺も中に入って、戦いの時を待つか……。岩陰から顔を出し、臭いを頼りに付近に誰もいない事を確認……。

「スン、スン……よし、誰も何もいないな。行くぞ、スノウ! 先ずは、あの人攫い共をぶちのめす!」

「ミガガ!」

俺とスノウも、パパスを追う形で遺跡に突入する。

そして……覚えておいた最短ルート、名付けて『ガンガンシヨートカットコース』で人攫い共のアジトへ向かった。

「グビ、グビ、グビ……かー! 仕事の後の酒はたまんねえなあ!」

「ガッハハハッ! 全くだぜえ! ウイック! ウィー……うん? 何だ、おめえはあ? いつの間に紛れこみやがったあ?」

酒をかつ喰らっていた人攫いの1人が、俺に気付いた。

「ガウツ！ガルルル！！」

「んん？そいつぁ……色は白いが、キラーパンサーの子だぞ？」

もう1人の人攫いが、牙を剥き出して唸るスノウに気付く。

「おお、言われてみりゃ確かに……ってこたぁ、おめえも魔族かぁ。
ひつく……驚かさねえでくれよ、人の悪い……って人じゃねえか
！」

「「ギャハハハッ！！」」

残りの2人が耳障りな笑い声を上げる。……もういい、さっさとぶちのめそう。

（1……2……！）

グッ……！

右腕に力を充填する……。流石に人間を殺すのは気が引けるから、半殺しで済むように『2連』で勘弁してやる。ゲマに備えて、力も温存しておかなきゃだし。

「へへへへ！まあ、飲みなよ！酒はいくらでもあるぜ！」

「……いやいや、それより俺がもっと美味しいもんをご馳走してやるよ」

俺がそう言ってやると、近寄って来た男は破顔する。どうでもいいが、酒臭え……。

「おおっ！そいつぁ有難えな！で？どんなご馳走なんだいっ？」

「ああ……たっぷり喰らうがいいぜ。『2連……』」

「へ？」

「『釘パンチッ！！』」

ズドンッ！ドッ！ドンッ！！

「けひッ——」

ズガアアンッ！！

「「なっ！？」」

『2連釘パンチ』で男を壁にふっ飛ぶと、残りの男2人が驚き立ち上がる。すかさず、俺はその2人にも襲いかかる——！

「お前らも喰らえッ！『2連釘パンチッ！！』」

ズドンッ！ドッ！ドンッ！！

「が——」

ズガアアンッッ！！

「『2連釘パンチッ!!』」

ズドンッ！ドッ！ドンッ！！

「ぼ——」

ズガアアンツッ！！

「……ご馳走様でした」

両手を合わせて、決めの一言——って、こんな奴ら相手だとこの言葉もあんまり言いたくない。それに、皮肉とはいえ『ご馳走してやる』と言っておいて、言った本人の俺が『ご馳走様』って言うのもなんか微妙……。

「「「……………」」」

周りを見れば、1人は壁に全身がめり込み、もう1人は頭だけが壁に突き刺さり、最後の1人は壁で跳ね返ったらしく血塗れで地面に倒れている。とりあえず、『駆除』は完了だな——。

「まあ、ここはこれで良し。それじゃ、出口付近でゲマを狙うか……。スノウ、ここからが本番だ。お前の力も借りる事になると思うから、気を引き締めるんだぞ」

「ミガ！」

人攫いのアジトを放置し、俺とスノウは再び最短コースで遺跡の出入口に戻った。

念の為、入口の部屋に入る前に鼻で中に様子を窺う……。

「スン、スン……（遺跡のあちこちに生えてるコケの生臭さとカビ臭さ、それに埃の臭いしかないな……よし、まだゲマは来ていない）」

確認が済んでから、今の内に身を隠す場所を探す。あの柱の陰が良いか……。

「よし、スノウ。柱の陰に隠れるぞ。気配を完璧に消してな……俺は向こう、お前はあっちだ。俺が合図するまで、決して動かず、気配も出すな。これから戦う相手は、今まで戦ってきた魔物達とはレベルが違う……覚悟しておけ。いいな？」

「ミガ……！」

多少緊張しているのか、スノウの顔が少し強張っている……。俺はスノウの顔を両手で包んで撫でてやる。

「大丈夫だ、スノウ……緊張してるのは俺も同じだ。だから、そんなに気負う必要はない」

「ミガウ」

スノウが俺の顔に頬を擦りつける。よし、少しは緊張が取れたようだ。そして、俺もスノウのおかげで緊張が楽になった。

「よし……じゃあ隠れろ、スノウ！」

「ミガッ！」

出入口に向かって右の柱に俺、左の柱にスノウが『消命』を使い隠れる。

『……ッ！……！』

20分程して……遺跡の奥が俄かに騒がしくなってきた。恐らく、パパスが奥で魔物と戦いを始めたんだろう。

と、その時――

「おやおや……部下から報告を受け、気まぐれに奴隷の子供を引き取りに来てみれば、随分と賑やかな事ですなぁ……」

出入口の方から、濃い紫色のローブを羽織った身長3メートルはあろうかという、肌の青い不気味な顔つきの男が現れた。明らかに人間じゃない……、全身からねっとりとへばり付く様な異様な殺気を放っている……。

（あいつがゲマか……！ゲームで見た時も気味が悪いと思ったが、実際にこの目で見ると背筋がゾツとする様な禍々しさがビシビシ伝わってくる……！）

生理的な嫌悪が心を乱す……。堪えなければ……！ここであいつに見つかって、正面から戦うのは避けなければならない……。悔しいが、今の俺では真っ向からゲマと戦っても勝ち目は薄い……。今日まで培ってきた俺の野生の勘が、そう教えてくる……。くそ！散々、修行したっていうのに……！

俺は悔しさに騒ぐ心を必死に鎮め、『消命』を維持して隠れ続ける。
と、その時――

「ハアハア！……もうすぐ出口だよ！ヘンリー、頑張って！」

遺跡の奥から、リュカがヘンリーとベビーパンサーを伴って走って来た。

「ほっほっほっ……」

「な、なに……！？」

不気味な笑い声で、出入口に立ち塞がるゲマに気付き、リュカが立ち止まる。すると、ヘンリーとベビーパンサーも立ち止まった。

「ほっほっほっ……ここから逃げ出そうとは、いけない子供達ですねえ」

ゲマは元々禍々しい顔を、更に禍々しく歪めて笑った。その異様な雰囲気、リュカ達は顔を強張らせている……。

「ほっほっほっほっ……、私の名はゲマ。さあ、いらっしゃい、子供達……。この私が、素晴らしい所へ連れて行ってあげますよ」

「あ、あ……ああ……」

「グウ、ガウウ……！」

ヘンリーは恐怖に顔を引き攣らせ、ベビーパンサーは恐怖を押し殺す様に牙を剥いてゲマを威嚇する。

「うう……！やあッ！」

驚いた事に、リュカは銅の剣を振りかぶってゲマに挑みかかった。

「ふん」

バシッ！

リュカの剣を、ゲマは軽く片手を弾く。

「あっ……！？」

「ほっほっほっ、勇敢だねえ。お止しお止し、怪我をするだけですよ」

確かにゲマの言う通りだ。リュカがいくら頑張っても、ゲマを撃退できる訳がない。

「ガウッ！」

リュカに続いてベビーパンサーまでもが、ゲマに襲いかかる。が――

「ふん」

バシンッ！

「アギヤア！？」

ゲマは蠅を払う様に、ベビーパンサーを弾き飛ばした。やはり、実

力の差があり過ぎる……！

「プックル！？ううう……！たぁー！！」

ベビーパンサーー！プックルが傷つけられて激昂したのか、リユカは我武者羅にゲマに挑みかかる。なんて子供だ……あのゲマを前にして動けるなんて……！？だが、それはあまりにも無謀ってmond
ーゲマは片手でリユカの必死の剣撃を防いでしまう。

「やぁー！ーッ！！」

「お止しと言うのに……聞き分けのない子供には、お仕置が必要ですねえ……カァァー！ーッッ！！」

ボオオオオツ！！

「うわぁぁぁー！ーッ！？」

ゲマは口から炎を吐き出し、リユカはその熱と衝撃でヘンリーの近くまで吹き飛ばされてしまう。くそお……辛抱してくれえ……！

「う、あ、ああ……っ！や、やめろおー！ーッ！！」

リユカが傷つき、ヘンリーが叫びながらゲマに向かって行く。だが、ゲマはヘンリーに冷めた目を向ける。

「……煩い子です、ねッ！」

バキィッ！

「うああッ!?!」

ヘンリーはゲマの右手に叩き飛ばされ、リュカの傍に倒れ込んだ。

「う……ヘン、リー……!」

何とか起き上がろうとするリュカだが、ダメージが大きいらしく動く事ができない。

「おやおや、これは少々お仕置きが過ぎましたか……大切な奴隷を、無駄に傷つけてはいけません。お仕置きは、このぐらいにしておきましょう」

ゲマがその骨ばった異様に細く尖った手で、リュカを掴み上げた――その時だった。

「待てえー……ッ!?!」

遺跡の奥から、剣を持ったパパスが駆けつけてきた。

「リュカあッ! ヘンリー王子いッ!」

「お……お父、さん……」

「ほう……パパス、流浪の王ですか……。なるほど、差し向けた配下共を倒したのは貴方でしたか。勇猛で知られる貴方が相手では、配下の魔物程度では敵わない訳ですねえ」

ゲマが面白いものを見たと言わんばかりに、口元を歪める。どうやらゲマは、パパスの素性を知っているらしい……。

一方、ゲマの姿を見たパパスが怪訝な表情を浮かべた。

「むっ……貴様は！？その姿、どこかで……」

「おや、これは光栄……大国の王たる貴方が、私の事をご存知とは。ほっほっほっほっ、では……私達、『光の教団』の素晴らしさもお教えしなくては……出でよ！ジャミ！ゴンズ！」

ゲマが空いた右手を前にかざす。すると、パパスの前の空間が黒く歪み、そこから2足歩行になった馬のような魔物と、棘のついた盾と斧のような刃の剣を持った醜い魔物が現れた。

「お呼びでございますか、ゲマ様……」

「何なりとお申し付けください……」

ジャミとゴンズが順に跪く。

「この方のお相手をして差し上げなさい……丁重に、ね」

「「ははぁッ！」」

（よし、俺も奇襲の準備だ……！）

2体の魔物にゲマが指図をするのを見て、俺は準備にかかる。

俺が隠れている柱は、ゲマの右側……つまり、都合のいい事にリユカを掴んでいるゲマの右腕が俺の方を向いている。ならば、まずは渾身の『ナイフ』でゲマの右腕をぶった斬る。そして、間髪入れず

に今の俺の最強の『釘パンチ』をゲマのボディに叩きこむ――。

（連続攻撃になる……なら、使うのは左腕――）

グググッ……！！

パパスがジャミとゴonzを相手に死闘を繰り広げる中、俺は左腕にパワーを集中させる。左腕の筋肉が膨張し、血管が浮き出る。

（俺の最強の『釘パンチ』――10連の『集中型』！更に貫通力を上げる為、『アイスピック』に！）

ビキビキ……！！

左手の指をピッタリと揃え、更に窄めて力を集中する事で『フォー』から『アイスピック』に換える。腕の負担を考えれば、この『一点集中10連アイスピック釘パンチ』は1発が限界……チャンスは1度！

この1発は、絶対に外せない……！！

「ぬうう……だあッッ！！」

バシユッッ！！

「ぐおおッッ！！？」

パパスの剣が、ジャミの胴を切り裂いた。

「おのれえ！！ぬがああ！！」

激昂したゴンズが斧剣で斬りかかるが、パパスは剣で受け止める。

ガキイインッ！！

「うおおおお……ッ！！！」 「ぐおおおお……ッ！！！」

パパスとゴンズは鏝迫り合いで力比べ——あの巨体の魔物と腕力で張り合うとは……やっぱりパパスは強い。ゲマの卑怯な作戦さえなかったら、負ける事はなかったんだ。

「つつたありやああああ！！！」

ガキンッ！バシユウッ！！

「ぐああッ！！？」

ゴンズの剣を弾き返し、すかさずその胴を切り裂くパパス。ゴンズはたまらず倒れ込んだ。

「ハア、ハア、ハア……！」

息を切らすパパスだが、まだ迫力は鋭いままだ。

「ほっほっほっ、これはお見事。たった1人で、ジャミとゴンズを退けるとは……ですが、こうするとどうでしょう……！」

ゲマはそう言ってニタリと笑うと、左手に1本の禍々しい鎌を呼び出し、右手に掴んでいたリュカの首筋に刃を当てた。

「リュカッ!？」

「これなるは、『死神の鎌』……この刃で斬られた者は、永遠に地獄を彷徨い、死して尚苦しみ続ける事になります。さあ、どうです？ 自分の子供の命が惜しくないと言うのであれば、存分に戦いなさい。ほっほっほっほっ！」

ゲマ……卑怯者め……！

「……だ、め……お、父……さん……」

リュカはかろうじて意識があるらしく、パパスに声を掛ける。

「リュカ……くっ！」

パパスは……悔しげに顔を歪めたが、次の瞬間、己の剣を放り捨てた。

「ほっほっほっほっ！ ジャミ、ゴンズ……」

パパスの行動にひと際愉快そうに笑うと、ゲマは倒れたジャミとゴンズの身体を呪文で癒す。

「お相手して差し上げなさい……」

「「ははあ！」」

息子のリュカを人質に取られ、手出しができなくなるパパスに、ジャミとゴンズが嫌らしい笑みを浮かべてジリジリと迫る。そして、ゲマがニタリと勝ち誇ったようにニヤニヤと笑った。

完全に油断している——チャンスだ!!

俺は柱の陰から飛び出し、ゲマに奇襲を仕掛ける――。

「『アアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!』」

ビリ
ビリ
ビリ
ツ
！！！！

俺の渾身の『威嚇』と雄叫びが響き渡り、その場にいた全員の動きが止まる。俺は一直線にゲマに突進し、リュカを掴んでいる腕目掛けて全力で右手を振り下ろす。

「『ナイフツツツ！！』」

ズバシユツ！！

会心の一撃——俺の『ナイフ』は、ゲマの右腕を斬り落とした。

「ぐ、がああああああーっ！？」

腕を落とされた激痛に、ゲマがそれまでの余裕が嘘のように叫び声を上げる。

俺の6年に渡る修行で身に付けた力……遂に発揮する瞬間が来た――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2620z/>

ドラゴンクエスト?～天空の美食屋～

2011年12月13日01時02分発行